目 次

はじめに ……2

東ティモール

1. 東ティモールの状況とパルシックの関わり……4
2. パルシックの活動……5
   1) コカマウの強化……5
   2) サココの取り組み……7
   3) 協同組合強化活動 ……8
   4) リタ村での水道事業……9
   5) 農村女性による食品加工事業 ……10

スリランカ

1. 内戦終了後のスリランカ ……12
2. パルシックの活動 ……15
   1) ジャフナ県帰還民生活再建支援 ……15
   2) 干物づくり支援 ……16
   3) キトゥル蜜生産者支援 ……17
   4) 東部洪水被災者支援 ……18

マレーシア

沿岸漁民による海洋環境保全支援……19

フェアトレード……20

広報……22

パルシックのめざすもの……24

はじめに

2010年度を終えて、パルシックの発足から、3年が経過しました。多くの皆さまのご支援、ご協力を得て、なんとか順調に、実績を積み上げてくることができたのではないかと思います。

2010年、東ティモールの協同組合の発展のために同国の協同組合専門家を日本に招き、また日本の専門家を現地に派遣するなどの活動を行ない、農村女性による加工食品の種類も増やしました。

内戦が終了したスリランカでは、北部ジャフナの各地に数年ぶりに帰還した漁民たちの漁業再開を支援すると同時に、10月から寡婦世帯を対象とした干物事業の開始にこぎつけました。また洪水被災者支援、南部のヤシ蜜生産農民支援など活動の幅も地域も大きく広げました。

また2010年から、ささやかではありますがマレーシアを活動現場に加え、東ティモール、スリランカとともに、パルシックらしい民際協力事業のかたちが形成されてきたと思います。それは農業や漁業を基礎として、コーヒー、紅茶、ハーブティ、干物などさまざまなモノをつくり、市場に販売することまでを支援することで、現地の人びとと助け合っていくという事業です。この分野での力をもっとつけていきたいと考えます。

日本では東ティモールのミュージシャンを招いてのコンサート、写真展や各種イベントへの出店などの活動を展開してきました。

2010年度の終わり、3月11日に宮城県沖にマグニチュード9の地震が起こり、それによる津波、さらには福島原発の津波被災による原子力汚染という未曽有の災禍に見舞われました。パルシックは、国内災害支援の経験もないところから、支援活動を開始するかどうか悩みましたが、スリランカで洪水被害があったときには駆けつけるのに、日本国内でこれだけの災害があって、黙視していることはできないと考え、被災地域の支援に取り組むことを決定しました。

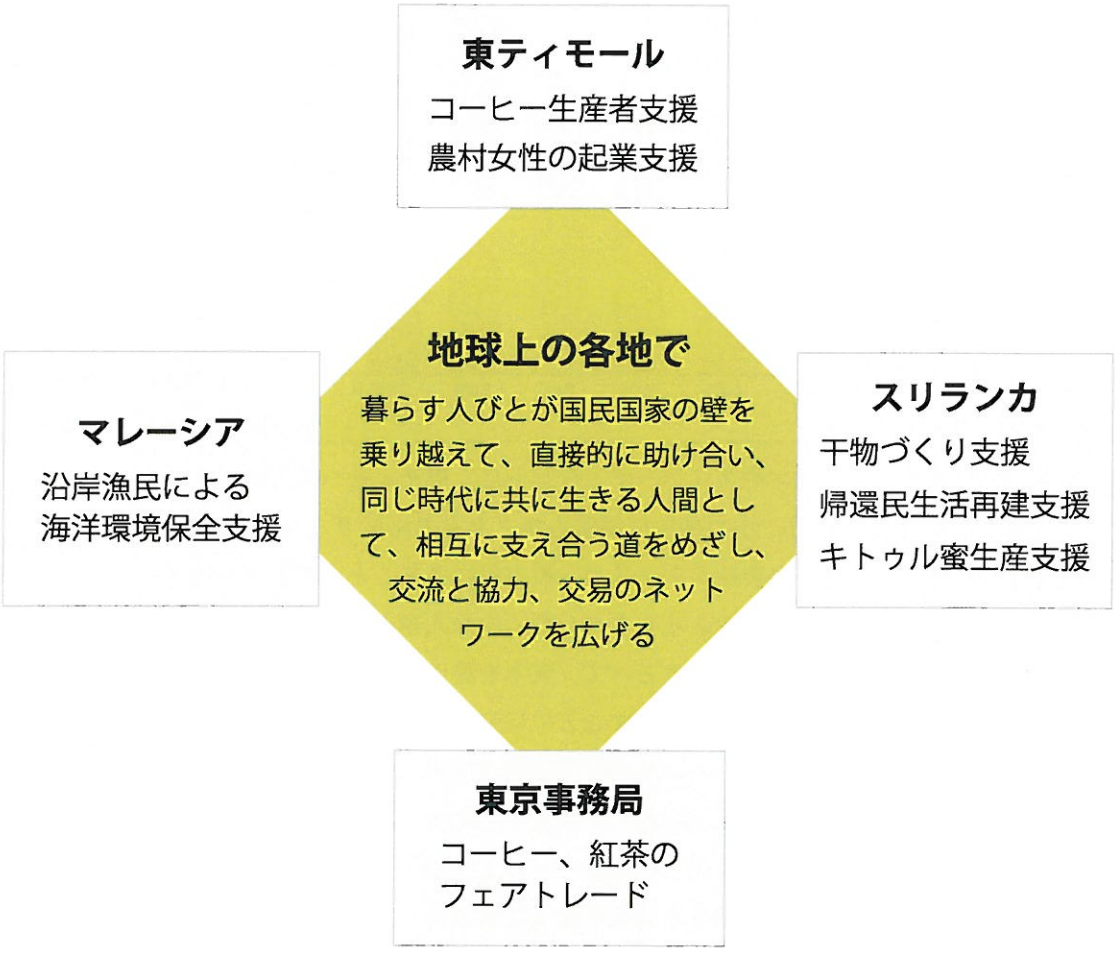
国内外で、忙しく走り回る2010年度となりました。その結果、多くの出会いと成果があった一方で、本来、2010年目標としながら、残してしまったいくつかの課題もあります。

2010年度目標としては、①コーヒー、紅茶の販売力をつけて生産者を支えること、②スリランカの平和構築、多民族共生社会実現のために貢献すること、③パルシックとしての協力者、

支援者の幅を広げることの３点を掲げました。このなかでも組織力量の形成につながる①と③に関しては不十分な結果であったと言わざるをえません。

例えば①に関して、予算では2500万円のコーヒー売上を計画しましたが、1800万円強の売り上げに留まりました。2010年度末になって営業ボランティアの方々のご協力が少しずつ実り始めていますので、2011年度の売上増につながることを期待しています。

また③に関してもサポーターや支援者の数という点では横ばいにとどまっています。しかしながら、諸活動を通じて協力者やボランティアの方々は確実に広がってきています。今後はこうしてご縁をいただいた方への情報発信などを継続していくことで支援者の数に具体的に結び付けていく努力を、強化していきたいと考えます。

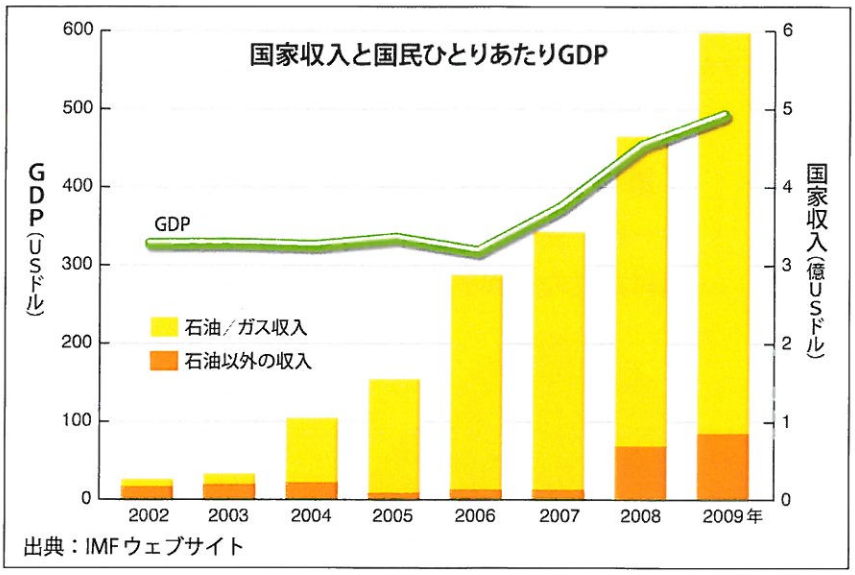


スリランカ、東ティモール、東京の各事務所にボランティア、インターンの方々の多様な協力を得て、少しずつですが、パルシックの力が形成され始めています。この経済危機の時代に、新しい働き方、新しい協力と協同の仕方の一翼をつくっていくという課題を2011年度にも引き継いでいきます。

東ティモール

1．東ティモールの状況とパルシックの関わり

ティモール海油田からの石油収益を使った開発政策が始まって3年目。治安状況は落ち着き、国連警察から東ティモール国家警察への権限移管が全土で終了しました。2010年度内に予定されていた統一地方選挙は地方自治体の役割が固まっていないということで延期となり、2012年に予定されている総選挙を国全体が少しずつ意識し始めています。UNMIT（国連東ティモール統合ミッション）は期限を総選挙後まで延長しました。



出典：IMFウェブサイト

経済面では公共セクターに多額の予算が割り当てられインフラ整備が進むにつれ、民間セクターも活気づいてきたことを実感します。ディリ市内ではショッピングモール、貸店舗、外国人駐在員向けの住宅地などが次々と姿を現しています。外国人が利用するレストランやスーパーマーケットに、東ティモール人の姿を見かけることは当たり前になってきました。小中高校の制服も色とりどりにデザインされ、20ドルほどのこの制服を買い揃えられる懐の余裕がディリの一般市民にあることを示しています。

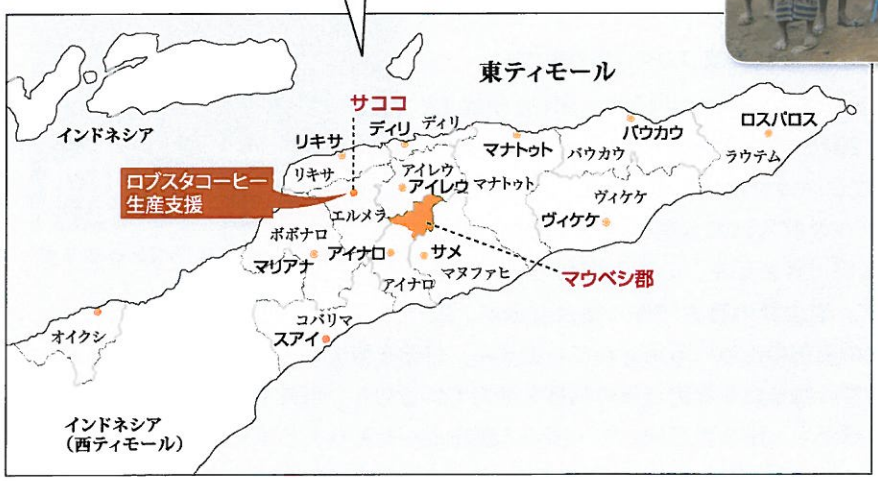
一方で、パルシックの活動地であるマウベシの山中の人びとの暮らしには、目に見えた変化がありません。特に農村部の人びとにとって、資本を持つ一部の人びとの暮らし向きがよくなる中、地道に長い目で生活の改善を目指すことには今まで以上の忍耐を要します。こうした状況の中、パルシックは東ティモールにおける協同組合活動の発展に向け、大きく二つのアプローチをとりました。ひとつには、2002年から協力し続けているアイナロ県マウベシ郡のコーヒー生産者協同組合コカマウを強化し、組合モデルとして他地域に紹介すること。その過程でエルメラ県サココ集落の組合活動とも連携し相互に学びあいました。二つ目は、東ティモールで協同組合の発展に携わる各方面との連携。現状では、協同組合法を掲げて法に則った協同組合数を増やそうとする政府と、人びとの暮らしやニーズに寄り添った結果として協同組合に行き着いたNGOとで、発展の方向性が一致しないばかりか、この小さな東ティモール内で互いに敬遠し合って協働することができません。協同組合を必要とする人たちのために、ひとつの目標に向かってそれぞれが役割を担うことを期待し、各方面との意見交換を進めています。

2．パルシックの活動

1）コカマウの強化

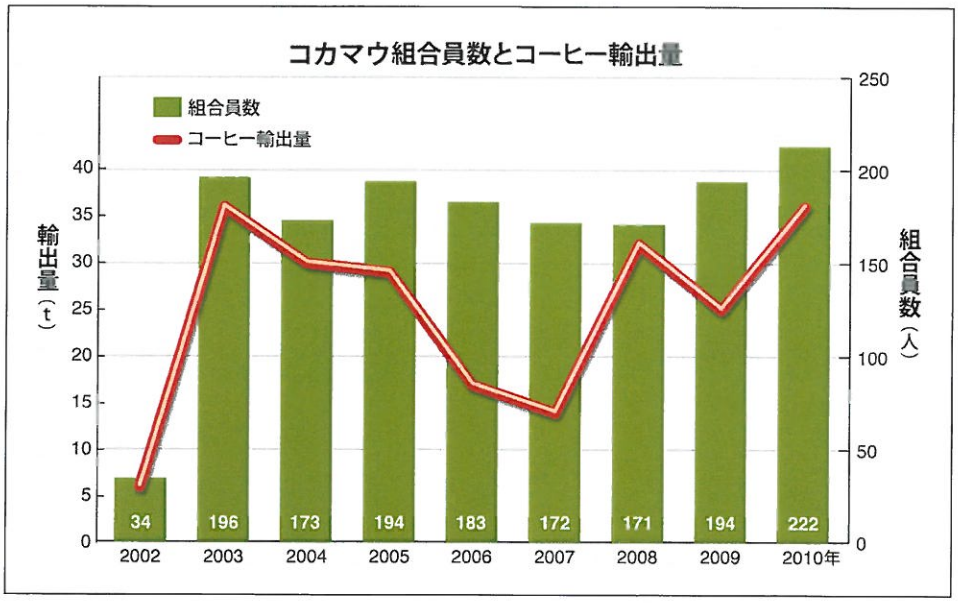
「組合員のより良い生活のために、強いリーダーシップ、独立運営、自立を達成する」という5か年ビジョン達成に向けて二年目の2010年度。マウベシコーヒー生産者協同組合（コカマウ）は6つの活動指針を立てました。①コーヒーパーチメント60トン出荷、②協同組合登記完了、③食糧共同購入継続、④役員及びグループ代表へのリーダーシップトレーニング、⑤預金者100名達成、⑥過去の貸付金の清算です。

新しくコカマウに参加したハヒタリグループ



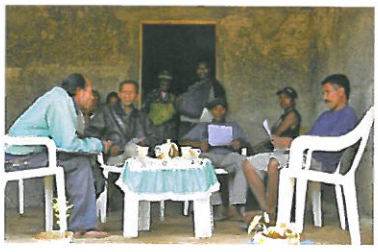
天候不順の影響を受けコーヒー収量は目標にわずかに及ばない54トン（パーチメント量）という結果になりましたが、04年のコカマウ結成以来最大の出荷量を記録しました。このコーヒーの売り上げのうち10,860ドルが組合資金に計上されました。預金者は53名（預金額692ドル）と目標の半数しか達成できませんでした。そのほかにも、法人格取得手続きが滞ったり、過去の組合員貸付金を回収するはずが倍に増えたりと、指針をほとんど達成することができない結果になりました。

しかしながら、結成以来はじめての剰余金配当を各組合員の出資金額に応じて出しました。最大で22ドルと額は少ないながら、組合員に必要とされる組合であろうとするための一歩ではありました。他方で、その組合員配当と並行して、年度末ぎりぎりの1月になって、2003年から少しずつ組合に積み上げてきた資金のほとんどを組合役員間で分配したという事実が発覚しています。一生懸命働いた報酬だという訳です。東ティモールの人々の希望や実情にあった組合の形とは何か、試行錯誤が続いています。



組合員の声

オラシオ・デ・アラウジョさん
（ベトゥララグループ代表、2010年度コカマウ監査役代表）


右端がオラシオさん（ベトゥララグループの集まりにて）

2009年にメンバー5名とコカマウに加入し、2010年は13名に増やしました。2010年のベトゥララグループのコーヒー出荷量は14トンで、コカマウ最大のコーヒー出荷グループです。コーヒーからの収入は加入前に比べて増え、家の屋根を修復することができました。しかし現在の組合運営には不満があります。組合員の働きで得た組合資金が、組合員のよりよい生活の実現のために運用されていません。月給を得ている事務局員は満足な働きをしていません。古参の役員たちは組合員の利益を考えていません。わたしにとって一番大切なことは自分自身の生活です。組合員が働いて一部の人間を太らせるシステムには賛成できません。

2）サココの取り組み

ロブスタ種のコーヒー豆を生産するサココ青年組合(KJHR)は2009年度、20トンの目標に対して700キロしか出荷できませんでした。2010年度はパーチメント20トン出荷を目標にし、加工工程に手間をかけたA級品のほか、従来の工程で加工したB級品も取り扱い、A級品出荷量を一世帯当たり50キロ以上とする、ということを決めました。粒の大きいアラビカ種に比べ、粒が小さく果肉も薄いロブスタ種は種子から果肉を取り除くことが難しく、手間も一層かかります。自前の古い脱肉機ではきれいに果肉が取れないという声にこたえ、パルシックは地元の大工に依頼をして新しい木製脱肉機8台をサココ青年組合に支援しました。

▲サココでの脱肉作業

▼石の上での選別作業の様子

結果、41.5トンのパーチメントを出荷し、組合は3,734ドルの収益を得ました。しかしながら内訳はA級品5トン、B級品36トンです。A級品50キロ以上のノルマを果たしたのは125世帯中28世帯、A級品をまったく出荷しなかった世帯は48世帯にのぼります。価格差があっても品質改善への意欲にはつながっていません。

まとまった量のコーヒー出荷を経験することで、新たな課題が浮き彫りになりました。日々各々が収穫、加工するコーヒーの品質をだれがどこでどのように管理するか、買い取ったパーチメントをどこで一時保管し、どのように出荷するか。コーヒーの共同出荷で得た収益を、どのように運用し、組合活動発展につなけげいくのか。来年度の収穫期に向け改善策を協議しています。

▲上野村農協を訪問するボニファシオ氏

▲山本氏による現地視察

▼東ティモールでのシンポジウムの様子

3）協同組合強化活動

①ボニファシオ協同組合局長の招へい

11月15日から23日まで、東ティモール政府経済開発省協同組合局のボニファシオ・コレイア局長を日本に招きました。全国農業協同組合中央会（JA全中）、農水省を訪問して日本の農協の機能、役割を学んだあと、埼玉県のJAちちぶ、群馬県の上野村農協を視察しました。また大阪府の関西よつ葉連絡会の多様な取り組みにも接しました。これらを通じて東ティモールにおける協同組合発展に、政府がどのような役割を果たすことができるのかをともに考える機会となりました。

②専門家の派遣

1月31日から2月13日の日程で、農民運動全国連合会（農民連）アドバイザーの山本博史氏を東ティモールに招き、東ティモールにおける協同組合の現状を視察いただきました。パルシックの支援地であるマウベシ、サココの他、計6か所のグループを訪れ、それぞれの地域における活動の特色を見ていただくとともに、東ティモールでの協同組合活動発展のために、既存のコミュニティを活かした組合作りをする、女性の力を活用する、などのアドバイスをいただきました。

③ディリでのシンポジウム開催

2月11日に東ティモール政府、NGOなどを招いてシンポジウムを開催し、ボニファシオ氏、山本氏や、現地NGOスタッフがパネリストとして参加、「現地の実情に沿った柔軟な法の運用を」、「政府やNGO、研究者が話し合う場を」といった議論が行なわれました。このシンポジウムの様子は、現東ティモール現地紙「ティモールポスト」にも取り上げられました。

(本事業は、JICA草の根協力事業パートナー型の支援を得て実施しています。)

4) リタ村での水道事業

2010年10月から2011年2月にかけて、コカマウに加入するマウベシ郡マウラウ村リタ集落で、3つの水源からおよそ180世帯に生活用水を供給する事業を行ないました。

リタ集落では、中心部に水源がなく、山の中に3–4か所ある湧水が住民にとって唯一の生活用水源となっていましたが、その水源も、多くの住民の住宅から遠く、傾斜の激しい山道を1時間ほど歩かなければなりませんでした。しかも、乾季にはわずかな水しか湧き出ず、土の中の水たまりから水を汲むと土などが混ざり飲用や炊事には不適切でした。清潔な水へアクセスできないことは、感染症や幼児の皮膚病の原因にもなっており、生活用水を水源地から家の近くまで運ぶための配管事業は集落住民の強い要望でした。

そこでパルシックが資材および技術を提供し、水道の建設配管作業をリタ集落の住民たちの手によって行ないました。例年になく、年間を通して降り続けた雨のために、水源近くのタンクの設置や、資材の運搬が困難となり、前半は作業に取り掛かることができずに難航しましたが、2月にタンクの設置、配管が完成、集落の家々の前まで、水道が引かれました。念願の水が家の近くで手に入るようになり、次は台所、玄関の建設を、と、新たな要望が挙がった家もありました。(本事業は、国際協力NPO助成および、地球市民財団の助成を得て実施しました。)

上：貯水タンクの建設
中：ホースをひくリタ集落の人びと
下：家の近くに水が来て喜ぶ住民

5）農村女性による食品加工事業

2009年11月より始まった女性生計向上プロジェクトは、2010年に入って本格的にスタート、コカマウの9グループ（2009年度）全体に声をかけ、半年間という長い話し合いの期間を経て、ようやく生産加工にこぎつけました。身の回りにどんな作物があり、いつの時期にどれくらい収穫できるのか、その中から加工してみたいと思うものを選ぶという方法で、ルスラウ、ハトゥカデ、ベトゥララ、マウレフォの4グループから活動が始まりました。

加工や栽培トレーニングを経て実際に生産加工を開始したものの、例年にない長雨のために植えた野菜が育たなかったり、バナナチップスのように思っていたほど原料が手に入らず、断念したりしたものもありますが、それをヒントに生まれた大豆スナックや、ハトゥカデグループのメンバーが一丸となって取り組んだハチミツは、東ティモール国内で販売できるまでに至りました。

また、実際の輸出・販売にはまだたどり着いていませんが、ハーブティの生産も進んでおり、ツボ草やミントなど、自生しているハーブを手摘みし、乾燥させて商品化を進めています。

会計簿ワークショップに参加する女性たち

ディリで開催された物産展にて
ハチミツを販売する女性メンバー

グループ	メンバー数	商　品
ルスラウ	4	バナナチップス　大豆スナック　（ハーブティ）
ハトゥカデ	6	ハチミツ　（ハーブティ）
リタ	4	ソラマメチップス　（ハーブティ）
レボテロ	2	ソラマメチップス　（ハーブティ）
ベトゥララ	6	マーマレード
マウレフォ	7	野菜栽培（トマト、ニンニク、ジャガイモ）

＊ハーブティのメンバーは確定していないため、
参加人数はそれぞれ除く活動参加人数。

この事業を通した2010年の女性たちの躍進には目を見張るものがあり、月に100ドル以上の収入を得られたメンバーもいます。2011年は家計簿つけや貯金など、収入を有効に活用できる取り組みにも力をいれ、ハーブティの販売も実現したいと思っています。

(本事業は、JICA草の根協力事業フォローアップ型の支援を得て実施しています。)

ハーブの試作品作り

ハーブの乾燥風景

ハトゥカデのメンバーの声

ハトゥカデのグループの女性たち

私たち女性が中心となって何かやってみたいと思ったことがきっかけで、今年から始めたハチミツの加工。活動を通じて、身近にあるものに工夫して手を加えるだけで、付加価値を付けて売ることができ、収入に繋げられると今回初めて知り、実感しました。こうして新しいことを知ることができ、とても嬉しかったです。また、これまで畑仕事など個人作業がほとんどでしたが、皆で集まって作業をすることでも収入を得られる道があることも発見できました。何もかもが新鮮で、活動を大変だと思ったことはなかったです。雨で作物が不作だった今年、収入は子どもの学費、そして食費に使いたいです。これからもローカルプロダクトを作り続け、できれば来年はもっともっと新しいことにもチャレンジしたいと思っています！